会　告

平成五年度史学研究会大会および総会は、予定通り、十一月二日（火）午後一時より京大会館において開催されました。

公開講演は高橋　正、竺沙雅章の両氏により左記の演題で行なわれ、盛会裡に終わりました。

文学空間における都市
——「上海一九四四」を中心として——　高橋　正氏

宋元文化の北流　竺沙雅章氏

なお、大会と総会に先立って開催された秋期定例の理事評議員会において、平成五年度会務報告がなされました。

平成五年度 史学研究会大会講演要旨

文学空間における都市
——「上海一九四四」を中心として——

高橋　正

一九四四年の上海での体験に基づいて著わされた武田泰淳の『上海の螢』と『月光都市』を対象として、彼の描く上海のイメージと敗戦直後の上海を舞台とした同氏の『蝮のすえ』における上海のイメージを対比しようとした。このためこれら三作品に示された「場所」を拾い上げたが、特に『上海の螢』に関しては主要「人物名」を取り出し両者の関係から「場所」のもつ意味を明らかにしようとした。

『上海の螢』は武田が、一九四四年六月上海で就職した「東方文化協会」（実は「中日文化協会」）を舞台とし、ここに在職する「理事長小田先生」（林広吉）、日本側理事「O博士」（小竹文夫）、中国側理事「T氏」（陶晶孫、上海自然科学研・郭沫若義弟）。「E氏」（石上玄一郎）、経理の「Y氏」（未詳、乞教示）とその他の中国人傭人、さらに協会を訪れた人々にまつわるエピソードをほぼ時の経過に沿って述べているが、ストーリーとしての展開は殆どなく、同著者の『風媒花』（中国文学研究会を回る人々の戦後の動向を題材とする）を三島由紀夫が評した「綴織風」ともいうべき自伝的小説となっている。

三島が『風媒花』のヒロインを中国であるとしたのに準えれば『上海の螢』のヒロインはまさに「中日文化協会」である。この協会の目的は国策に沿った中日文化交流の推進であるが実際に行なったことは日本の本を中国語訳することで武田はこのために同協会内の「東方編訳館」に招かれたが翻訳されたのは僅かに二冊（小泉八雲『惑女の日記』と石原忍の子供向け科学書）であって、彼は事務所で『二十五史』を読む等していたようである。

他に協会が行ったこととしてE氏がバレリーナーの小牧正英（当時「バレエ・ルッス」所属）の蘭心劇場（現芸術劇場）でのバレエ公演の援助や国策映画「春江遺恨」（邦名「狼火は上海に揚る」）に関する座談会等で余り見るべき仕事はなかった。

ただ同年十一月十二―十四日南京で開催された第三回大東亜文学者大会に多く文人が来滬し、その接待がこの協会の主な任務であったようで、長与善郎、火野葦平、阿部知二、高見順、小林秀雄、（ある者は匿名）等が協会を訪れている。その他「姓が違う近衛の実弟」（水谷川男爵）、京大でO氏の同級生であった外務省の役人や妻を連れた若い男等「必要のない日本人が突然訪れる」ことが多かった。協会はまさに権力の「蜜壺」であったと思われる。

中日文化協会の成立については目下探索中であるが、理事長が近衛文麿のブレイン集団「昭和研究会」のメンバーであったことから近衛との関係も推測され、文中では上海競馬場の上りで運営されているとの記述もある。また、内山完造の『花甲録』や『そんへえ・おおへえ』によると興亜院から同氏に協会設立の発起人になるよう依頼があったが断ったとしていることから興亜院の肝煎りで設立されたと考えられる。

林広吉は協会設立以前、上海市政研究会（一九四一年六月一日設立、四三年八月十四日解散）の事務総長であった（『上海居留民団三十五周年記念誌』一二五五―五九頁）。また、四三年四月一―三日南京で開催された中日文化協会（名誉理事長汪兆銘主席）第二回全国代表者会議との関係も考えられる。林はかつて近衛内閣の書記官長（第一次）や司法大臣（第二次）であった風見章（林と同じ信濃毎日・朝日新聞社）の下にありマルクス主義思想に傾斜したこととあって上海行きが一種の逃避行であったとされているが武田や石上にも同様な事情があり協会は権力の傘の下でのアジールの役割を果していたといえよう。なお、上海市政研究会編『上海の文化』に、四三年秋、中日文化協会が解組されたとの記述があり、この頃林を中心とする協会の体制が確立したと推察される。

中日文化協会は、旧フランス租界のアヴニュ・アルベール（亜爾培路、現陝西南路）とアヴニュ・フォッシュ（霞飛路、現延安中路）の交差点を少し南に行った右手にある、アンデルセンの童話に出てきそうなノルウェー風の豪邸（現共産主義青年団）にあり、「フェアリーランド」と呼ばれている。この旧フランス租界は旧上海県城（旧市街）とは勿論、バンド附近の旧イギリス租界や俗称日本租界（虹口、旧アメリカ租界の一部、呉淞路・北四川路付近）と大変違った町並とアトモスフェアを有していた。

『月光都市』と『上海の蛍』に描かれた上海のイメージは殆ど旧フランス租界のそれに限られ、敗戦後引揚げをひかえての日僑集中地区、虹口での生活を題材とした『蝮のすえ』の描く上海とは、権力の逆転ということもあって当然とはいえ大いに異なっている。

宋元文化の北流

竺沙雅章

遼・金を含めて宋元時代の華北文化は、江南にくらべて明らかでないところが多い。その第一の理由は史料が少ないことである。仏教文化についていえば、当時の仏教史籍がすべて江南で編纂されたこともあって、華北に関する記述は極めて少ない。またわが国との文化交流も江南地方が主であったので、例えば大蔵経にみられるように、華北の仏教文物でわが国に伝来し遺存しているものはほとんどない。こうしたことから、華北仏教に対する関心は薄く、したがって研究成果も乏しい。ところが近年、遼・金

・元代の仏教文物の発見と整理とがさかんに行われ、不明であった華北文化に光があてられることになった。ただわが国では、まだあまり注目されていないので、新出資料の現状について概略紹介し、そのなかで注目される二、三の問題について述べてみようと思う。

第一は、房山石経の調査である。隋の僧静琬が発願して始められた、北京の西南郊にある房山の刻経事業については、碑記等によって古くから知られていたが、石室に封蔵されているため石経そのものをみることはできなかった。一九五六年から中国仏教協会が中心となって石経の全面的な調査整理が行われ、とくに一九五七年には、南塔近くの地下に封蔵されていた遼金の石経を発掘し、すべての石経の拓本がとられた。その調査報告として『房山雲居寺石経』が出版され、『房山石経・遼金刻経』が現在刊行中である。こうした資料集によって、はじめて房山石経を漢訳仏典の一テキストとして利用することが可能になったのである。

第二は、一九七四年に山西応県の仏宮寺木塔第四層に安置された釈迦像胎内から、遼代の文物が発見されたことである。最初の報告は『文物』一九八二年六期に載り、一九九一年には、発見文物すべての図版を収めた大型の図録『応県木塔遼代秘蔵』(以下『秘蔵』)が出版になった。発見文物は総計一六〇件、そのなかには『契丹蔵』零巻を含む木版仏典四七巻、写経八巻、『蒙求』をはじめとする雑刻・雑抄二八件などがある。これらは遼代仏教に貴重な史料を提供するだけでなく、中国文化史にとっても極めて重要な発見であって、中国の学者のなかには、これは敦煌文献の発見にも比すべきものだとまでいっている。なかんずく遼代の木版本が多数発見されたことは、特筆しなければならない。従来、遼代版本は一点も遺存していなかったが、この発見によって、一〇・一一世紀の遼代でも印刷術が発達し、とくに燕京、今の北京には民間の出版業者がいて暦や仏典を開版していたことが明らかになった。これは、中国印刷文化史に新たな一ページを加えるものである。

第三は、『金蔵』の影印出版である。この刊刻の大蔵経は、一九三三年に山西趙城県広勝寺で発見されて、学界の注目を集めた。そのなかの古逸仏典は『影印宋蔵遺珍』として逸早く影印出版されたが、蔵経自体は影印されなかった。現在、この蔵経は北京図書館にあって整理が進められ、刊行中の『中華大蔵経』はこれを主体に影印したものである。その出版が完成すれば、現存する『金蔵』の全容を坐らにしてみることができるわけで、漢訳仏典の版本研究に資するところは大きい。そもそも『金蔵』は、尼の崔法珍の発願にかかり、解州天寧寺を中心にして、山西南部の大戸・農民たちの出資によって雕造されたものである。その完成後、版木は燕京に運ばれ、弘法寺経蔵に置かれて、元初まで印刷と版木の修補が重ねられた。近年の研究によって、至元の『弘法蔵』は『金蔵』の修補本であることが明らかになった。また、チベットの薩迦北寺で、五五五巻にのぼる『金蔵』の一二五六年以前補雕本が発見された。これは、印刷ののち燕京の大宝集寺に安置されたものなので、大宝集寺本とよばれる。

第四は、元代の官版蔵経零巻の発見である。右の『金蔵』大宝集寺本のほか、雲南図書館で官版大蔵経零本三二巻が発見され、また北京市内の智化寺でも延祐年間刊刻の蔵経零本が見つかっている。これらは従来

全く知られなかった蔵経であり、今後の研究が待たれるものである。

以上の新出文物のうちで、もっとも中国の学界で注目を集めたのは、幻の大蔵経とされてきた『契丹蔵』の経巻が発見されたことである。この大蔵経については従来、文献史料から興宗朝より道宗朝にかけて雕造されたとみられていた。ところが、応県木塔から発見された刻経中には、蔵経本の指標とされる千字文帙号を付した経典が一二巻あり、そのうち『称讃大乗功徳経』には統和二十一年（一〇〇三）の題記がある。そのことから、この一二巻はすべて『契丹蔵』零本であり、この蔵経は旧説よりも早く、聖宗朝に雕造されたとする新説が行われることになった。これに対する異論が出て一部修正されたが、決定版ともいうべき『秘蔵』解説でも『契丹蔵』本は一二巻で聖宗朝の雕造としている。しかし『秘蔵』に収めるこれらの経巻をよくみると、一二巻の版式は一様ではない。明らかに蔵経本とみられるのは『中阿含経』等七巻であって、他の五巻は、右の『称讃大乗功徳経』を含めて、蔵経本かどうか決めかねるものである。また碑記等に、聖宗朝雕造を裏付ける記事はみられない。したがって、『契丹蔵』の雕造年代については、さらに検討していく必要があろう。

ところで、宋元版蔵経の版本系統に三類あることについては、すでにさまざまな機会に述べてきたので、ここでは詳しくは説明しない。ただ第一類『開宝蔵』系は『金蔵』から元代の『弘法蔵』さらに『延祐蔵』へと継承され、第二類『契丹蔵』は房山石経の遼金刻経の版下として用いられたことを指摘するに止める。こうした蔵経の系譜は、宋元文化の北の流れを如実に示すものといえる。さらに興味深いことは、新出資料により、『契丹蔵』は燕京弘法寺で校勘雕印されたことが明らかになったが、金代には同寺の経蔵に新雕の『金蔵』経版が蔵置され、少なくとも元代まで存続した。それに対して、『契丹蔵』は金代以後この世から全く消え失せてしまった。『金蔵』が『契丹蔵』に取って代わったのは、どのような事情によるのであろうか、新たな疑問がわいてくるのである。

応県木塔から発見された文物のうち、『契丹蔵』経巻と並んで重要なものは、仏典の章疏類である。その一は華厳関係の章疏で、なかでも唐の澄観のものが多い。従来の諸研究によって、遼代には華厳教学がさかんに行われ、とくに澄観の著作が重んじられたことが知られているが、新出文物はその事実を裏付けることになった。澄観の著作のうち、『大方広仏華厳経随疏演義鈔』は巻一上・下、巻五上半（異版）と巻五上の四巻の刊本が発見された。興味深いことは、すでに『秘蔵』も指摘しているが、その版式はもとより字形まで、わが東大寺蔵本と一致している点であり、東大寺本は遼刊本の忠実な覆刻であることが分かる。東大寺本は、高麗の大覚国師義天が編纂雕印した『高麗続蔵』本であって、一〇九四年から九六年にかけて開版され、わが国には一一二〇年ころに舶載されたといわれる。これより先、空海ら入唐僧も『演義鈔』を将来していたことが目録によって知られるが、これは早くに失なわれたらしく、後の華厳学で用いられたのは東大寺本の覆刻本であった。高麗や宋でも同様で、この時代の『演義鈔』はすべて高麗本に基いていた。その高麗本のルーツが実は遼刊本であったわけで、遼代仏教が当時の東アジアで決して孤立した存在ではなく、極めて重要な役

割を果たしていたことが分かるのである。なお宋元の華厳宗は、江南の杭州が一つの中心地をなしていたが、『明高僧伝』によると、元代には華北に華厳宗の僧が輩出している。彼らが遼代の華厳教学とどのような関係にあったかは、今のところ明らかでない。

華北における仏教教学の系譜がはっきりとたどれるのは、慈恩（法相）宗の場合であり、その代表的学者は遼の詮明である。彼の著作で伝存するものは一部もなく、その事蹟も分からなかったが、『金蔵』中から二部三巻が見つかり、注目を集めた。応県木塔からもさらに『法華経玄賛会古通今新抄』（『法華新抄』）など三部四巻が発見され、その題記から彼が聖宗朝に活躍した学僧であることが明らかになった。新出著作のうち重要なのは『法華新抄』であり、『秘蔵』によってその内容を知ることができる。これは唐の窺基『法華経玄賛』の詳細な注釈書で、外典の引用も多く、『論語』などは孔注まで引いている。とくに興味深いのは、『左伝』隠公三年条の引用文である。これは本文だけで一五七字、それに杜預注、音注が加わる長文である。その引用文に現行本と異なるところがある。はじめ遼代通行本の誤りかと思ったが、よく調べてみると、実は唐の栖復『法華経玄賛要集』（『鏡水抄』）の誤りを踏襲したものであった。詮明は『鏡水抄』に多くを依拠し、しばしば「大抄云」として引用する。またこれに先立つ智周の『法華経玄賛摂釈』も多く引かれており、彼が窺基―智周―栖復と連なる唐代慈恩宗の正統を継承していることが分かる。『法華新抄』は高麗、北宋さらに敦煌に伝わっており、彼はいわば当時の国際的学者であった。本書が日本にも伝わっていたことは、貞慶『法華開示抄』にこれがさかんに引用され、また「憫忠寺沙門詮明法師」とも記されていることから明らかである。この『法華新抄』を、いつ、誰がもたらしたのかは分からないが、あるいは成尋が送り届けたものかも知れない。前稿で述べたように、華北では唐末以来、慈恩宗が行われ、北宋末金初には学僧守千が多くの著作を残し、その学統は元代に及んだ。さらに、それが明末の法相学にまで影響を与えた。つまり華北仏教ないし華北文化の流れをもっとも顕著に示すものが、慈恩宗なのである。

編集後記

また新たなる年をむかえ、『史林』も第七七巻という齢を迎えることになりました。これもひとえに会員諸兄姉のご理解のたまものと存じます。目下、刊行の遅れを取りもどすべく編集委員一同、懸命の努力を重ねておりますが、投稿者各位におかれましても、完全成稿による投稿、校正過程の迅速化、適切なる地図の作成等の面でのご協力をいただけますようお願い申し上げます。

（石）

本誌には文部省科学研究費補助金研究成果公開促進費が交付されております。

一九九三年一二月二五日印刷
一九九四年一月一日発行　定価一二〇〇円　送料五二円
史林　第七七巻第一号（通巻第三八三号）
京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内
発行人　史学研究会
振替京都七―五一五五番
理事長　朝尾直弘
京都市下京区七条御所ノ内中町五〇
印刷所　中村印刷株式会社